二章 失われた時の中

『竜害』の発生地点より離れた場所に、小さな肉片が散らばっていた。

　地脈から【力】が噴出するきっかけとなった導力列車に乗っていた人物だ。地脈に潜行して加速する特殊な魔導列車は、導力経路を捻じ曲げられて爆散した。当然の末路として、乗車していた彼は原形が残らないほどに四散した。

　死体とも称せないほど細かくなった人間のに、異変が起こった。

　竜害の集束を逃れた肉片が、徐々に溶けていく。魔導に見識がある人間が見れば、原罪魔導発動の際にげられるの末路と似ていることに気がついただろう。メノウやアーシュナならばより具体的に、『』が自身の死を生贄にして自分自身を召喚する際の現象と結び付けたはずだ。

　辺りに散った肉片がすべて消え去ると同時に、どこからともなく一人の男が現れた。

　紳士服を着た小太りの男だ。

　彼は傷一つない自分を確認して、鼻を鳴らす。

「やれやれ……」

　カガルマ・ダルタロス。身分制度へ不満を抱く勢力をまとめ『盟主』と呼ばれている彼は、くるりと愛用のステッキを回して肩をく。

「ひどい目にあった。あの娘さんたちも大胆なことをするものだよ。乗っていたのが私でなかったら死んでいたところだ。しかし、だからこそ手段を選ばずになく実行したことは素晴らしい。あの結界都市が跡形もなくなったことに痛快さも覚える。ふうむ、評価に迷うね」

　被害に巻き込まれない遠方に召喚されたおかげで、『竜害』の全容がよく見えた。

　教典魔導による人為的な地脈の誘導を利用した、【力】の暴発。『竜害』に発展したのは、さすがに想定以上の結果だろう。数時間、聖地につながる【力】の大動脈を絶つのがいだったはずだ。

「それとも、私が死なないということを知っていたのかな？　さて、どう思うかね、エクスぺリオン」

　彼が振り向いた先には、一人の男がいた。

　中肉中背の、これといった特徴のない男だ。腰に刀を下げている。立ち姿から感じられるものが一つとしてない。表情のない顔立ちのまま、ろな印象を受ける。

　彼は最初から、カガルマがここにいると決まっているかのようにんでいた。

　エクスペリオン・リバース。

　大陸で最強といえば、彼を差し置いて語られることのない騎士。最高の肉体を持ち剣と紋章で他者の追随を許さぬ技術を磨きながら、いまやガラクタに近い魂と精神しか持たない男だ。彼はカガルマの問いには答えず、自分の目的を告げる。

「迎えに来た」

「願い下げだね。消えてくれたまえよ」

　古くからの知り合いだ。付き合いこそ長いが、二人の間に友好的な雰囲気はない。

「グリザリカなどに戻る気はない。あの時は記憶が消えるのを待っていたが、いまは生き甲斐があるからね。私は私の娘となってくれた子を迎えに行かなくてはならないのだよ。【防人】の陰謀に割く時間は── 」

「めろ」

「──おや？」

　カガルマの長台詞にエクスペリオンが口を挟む。

「マノン・リベールは諦めろ。そう言われている」

「ああ……そうなのか。【防人】が言うなら、諦めるべきなのだろうね。ああ、嫌だ嫌だ。あれは、どこまで人のことを見透かしてくれるんだろうかね。『主』もそうだが、私はアレのことも好きになれない。我らの中では【魔法使い】が一番健全だ。まあ、彼女には私のほうが嫌われてしまっているのだがね」

　エクスペリオンの報告に肩を落とす。彼にしてもマノンには少なからず思い入れがあったのだ。

　だがすぐに表情を切り換えて、うさんくさい笑みを浮かべた。顔を上げた彼には、こだわっていた気配のすらない。

「まあいいさ、エクスぺリオン。君にしては気がくことに──私が導く新しい娘を用意してくれたんだろう？」

　にこやかな視線を向けた先、エクスペリオンの肩口の向こう側には、見るからにしい少女がいた。

　外見と内面がこれほど一致している人間も珍しいだろう。全面的に体のラインを隠すことないドレスは、美しさを隠すまでもなく見せびらかしている。彼女の赤みがかった金髪を見て、カガルマが目を細める。

「あの子の、妹か。素晴らしく意志の強いことが一目でわかるよ」

『妹』という代名詞に、アーシュナは彼女らしくもなく鼻白む。

「……『』の盟主ともあろうものが、姉上と面識があるかのような物言いだな」

「あの子があの子であった時から知っているとも。君はあの子によく似ている。もしかしたらあったかもしれない、あの子の未来を見ているかのようだ。そう考えるとこみあげてくるものがあるね。さて、アーシュナ嬢。よければ私のことをパパと呼んでくれたまえ。そうしてくれれば、私の力を貸してあげよう」

「貴様まさか、血縁でも欲しいのか？」

　にこやかな口ぶりで鳥肌が立つ提案を始めたカガルマに、アーシュナはでも突きつけるような冷ややかさで返す。

「いないだろう、貴様らには。生まれながらに家族などいないのが、貴様ら【】だ。そもそもお前らは、人間なのか？」

「……ほう」

　カガルマが感心した吐息をらす。

「そうか、知っているのか。いや、知らずとも勘づいているだけかな？　【】という単語だけはどこかで聞いたのだね。カマをかける論調すら果敢だ。オーウェルの事件のどさくさに紛れて君がグリザリカを出て放浪を始めた気持ちも、よくわかるよ。グリザリカ王家に生まれてしまうとは、君も不運だね」

　アーシュナの鋭い視線にもまるでひるまない。ベラベラと長ったらしい口調を変えることなく舌を回す。

「特に、メノウ君に目を付けるあたり、おそろしく勘がいい。なにが見えているのか、いささかの興味があるよ。素晴らしい直感だ。大事にするといい」

「詮索と自分語りを同時にするとは器用な舌だな。余計なことを話すのがよほど好きと見える」

「大好きだとも。口から生まれてきたに違いないとはよく言われたものだ。それこそ、そこのエクスペリオンがまだマトモだった頃などは、よくたしなめられたね。それで？　グリザリカ王国からはるばる聖地まで来て、なにがわかったかね。もしくは協力できる仲間が集まったかい？　いまの君の姉に対抗できる武器を手にできたかい？」

　人を食った笑みに、アーシュナは顔をしかめる。の王族として尊大と寛大を旨とする彼女をして、カガルマへの生理的な嫌悪感が抑えられない。

「やはり知っているのか？　姉上の変節の理由を」

「知っているよ。君の姉はある日、【】になることを強いられた」

　アーシュナ自身、確信はしていない事柄だ。疑いを持ちつつも、あり得ないと否定していた。

　それを目の前の男が知っている。

「私たち【】は、古代文明期にそれぞれ別のコンセプトで造られて役目を押し付けられた不死の人間でね。異世界から召喚した純粋概念を利用して、この世界の人間が寿命から解放されようという研究は、千年前は当たり前にあったんだよ。信じるかね？」

「……話を続けろ」

　信じる信じないの是非は置いて先を促す。

「私などは、肉体に原罪魔導の性質が混ぜられている。ある一定以上の肉体の損壊が原罪魔導への生贄だと条件設定をされ、失った部分の召喚がされる。純粋概念の魔導ではないから記憶の消費も起こらない。いやはや、おかげで木っ端みじんになっても死なないんだよ」

　自分がいましがた蘇ったりをあっさりと明かしたカガルマは情けない顔をする。

「これはこれで、とてもつらい」

「貴様のありようがおぞましいことは、よくわかった」

「ありがとう。少しでも私のことを理解してくれたようでしいよ。とはいえ語れることなど、さしてない。私は周期的に記憶を消されていたからね。人格を守るために、そちらのほうがよかった。【】の中でも私のコンセプトは『肉体的な不死身』であって、魂と精神にはすぐれない。言ってしまえば『』の不死性を、副作用なく実現するため実験で生み出されたんだ。成功したからには、私の処遇など、どうでもよかったんだろうね」

「その割に貴様は『』などというのをつくって、大陸を巻き込んだ騒動を起こしていただろう？」

「不満の受け口だよ。そういうものがあったほうがいい。【】にはそれぞれ役割がある。私は三つに分かれた身分制度を維持する役割を担っているわけだ。『主』は魔導技術の発展を望まなかったからね。彼女の意図に沿ってが定めた禁忌の線引きに対する不満はる。現体制に対する反乱分子をまとめ上げて、定期的に瓦解させる。いまの『』の有り様を見てごらん。そんな役どころが私なんだよ。知らずにそんなことをしていたのだから、我ながら怒りに震えるさ」

「使い捨てのような人生の使い方だな。そこまでされて付いていく価値があるのか？」

「価値？　はは！」

　アーシュナの問いに、さもおかしいことを聞いたと笑う。

「あるわけがない！　とっくの昔に見放しているよ！　【】の全員がねッ。千年だぞ？　付いていけるはずなどないだろう!?」

　カガルマの表情に激情がけた。情緒が安定していない。相手の不安定さに、アーシュナは付け入る隙を見出した。

「だけどね……強いんだよ、彼女は。教典に記された、の『主』は」

　あまりにも、残酷なほどにどうしようもない理由を告げる。

「世界か、彼女か。それほどに、強いんだ。なにより彼女は、まがりなりにも、れもなく、世界の守護者だ」

　強さ。

　カガルマが告げたものは、アーシュナが絶対的に求めていたものだ。求めて、事実として強くなり、それでもまだ、遠くばない。

　美しく生きたいから、他のなににも左右されない強さが欲しかった。人はが意思を持つからこそ輝くのだ。他人に自分の生きかたを汚されるのは、アーシュナがもっとも嫌うことの一つである。かつての姉を憶えているからこそ、強く思う。

「貴様が『』の性質を移植した不死身だというのなら」

　自分自身がほかの何者かに侵されるなど、我慢ならない。

「いまの姉上の、なにを持って不死だという？」

「【防人】は『精神的に不滅』な存在だ」

　エクスペリオンは二人の会話に口を挟まない。なにをする意図もなく立ち尽くしている。

「詳細は？」

「【憑依】だよ」

　カガルマは、一言で答えた。

【憑依】。

　アーシュナも一度だけ目撃したことのある魔導だ。砂漠でメノウと共闘した時に現れた三原色の魔導兵は、【憑依】の魔導でメノウをしようとしていた。

　人の記憶と人格をつかさどるのが精神とされている。魂の機能に関しては議論の余地があるが、【力】の心臓に近い機能を持っているというのが論調だ。

　どちらが欠けても人間は生きていけない。

　しかし自分の機能が欠損した時に、他人のものを移植するという発想はありふれている。

「『絡繰り世』の前身である【器】の魔導を精神に宿したアレは、自らの遺伝要素を持つ肉体に精神を憑依させることができる。グリザリカ王家は、【防人】が生きつなぐため存続しているといってもいい。わかっているのだろう、アーシュナ嬢。君にとって不運なことにね、君のお姉さんも、その犠牲者だ」

「ちっ」

　彼女らしくもない苛立ちを見せたアーシュナは、後ろを振り返る。

　答えは見つけた。不審を抱いていた、自分の姉の変節。敵の正体は見えた。

　だが、強さが足りない。

　自分一人では、後ろに佇む男一人すら倒せないのだから。

「こんなにも不愉快な気分になるとはな」

　なにもかもが消化不良だ。エクスペリオンに出会ってしまった時点で、聖地においてアーシュナにできることはなくなった。

　求める道を進んでいるメノウやモモに、この男の相手までさせるわけにはいかなかった。

　アーシュナは、自分のことをだと思ったことなど、ただの一度もない。だがいま明かされた事実は不愉快だった。

「貴様の考えを二つほど訂正させてもらうぞ、【盟主】。まず私が目を付けたのは、メノウではない」

　アーシュナが興味を抱いたきっかけとなったのは、桜色の髪を二つ結びにした少女だ。メノウはメノウで興味深いが、よりアーシュナの心を引いたのはモモだった。

「ふむ？　それは気になるが……もう一つは？」

　問われたアーシュナは彼女らしく、絶大な自信をもって宣言する。

「お前は私のことを不運と言ったが、私は、自分の天運を疑ったことがない」

　カガルマに向けられたのは鮮烈な笑顔だ。傲慢なほどの自信に満ちた笑みで宣言する。

「だから私に付いてこい。気色が悪い貴様の娘になどは断じてならんが、部下としてならこき使ってやろう。私はお前を連れてグリザリカに戻る」

【盟主】が目を細める。

　なるほど、ここまで読んでのエクスペリオンの派遣かと納得した。同時に、【防人】に読み切られながらもこの少女ならば打ち破れるなにかがあると期待に心惹かれる笑みだ。

「さすがは、あの子の妹だね」

「バカめ。私はいまの姉上も、当然、昔の姉上をも超えて勝利をむぞ」

　アーシュナは堂々と言い放って視線を西へと向ける。

　白く輝いていた聖地を見ることはできない。いま起こっている出来事を象徴するかのように、『竜害』が誕生の余波をまき散らして世界を満たしている。

　訪れる時、モモと一緒に歩いた道だ。あの時は楽しかった。意地っ張りでわかりやすい反応を返すモモは、不思議とアーシュナの関心を引く。



　グリザリカで出会って以降、同じ旅路をたどっていた少女たちとは目指す道が分かれることを自覚してアーシュナはを返す。

「また会おう」

　届かなくとも、別れを告げない理由にはならない。いつか再会することを寸分も疑うことなく、『姫騎士』アーシュナ・グリザリカは聖地の騒動を置き去りに立ち去った。

　導力光のが世界を染め上げている。

　地面に空いた大穴から噴き出る地脈を起点にして、導力光がを巻いて大気をらせる。びゅうびゅうと悲鳴を上げる風、地鳴りとともに削り取られる地面。光彩を放つ【力】の濁流は、一向に衰える前兆がうかがえない。

　周辺の物質を削りとって糧にしながら、内包する【力】はぐんぐんと伸びていく。いくら導力と物質を取り込んだところで魂は生まれないのだが、巨大すぎる【力】はひたすら無軌道に膨らみ続ける。が召喚した魔物を素材として巻き上げたせいだろう。心なしか体表が肉付いており、まさしく生物の様相を呈していた。

　魂なき【力】が肉体と精神を求める、擬似生命現象。

　なんて恐ろしい。

　のレンズを通して見える【力】の奔流に、神官であるフーズヤードは震えた。

　あれが数十年に一度の頻度で発生する『竜害』。

　直近で大きな被害が出たのはグリザリカ王国だ。五十年ほど昔に発生して遊泳した『竜害』を前に、あの国はを余儀なくされるほど国土を失った。かの地で当時は無名だった神官オーウェルは、混乱する情勢のなか多くの人々を率いて『竜害』を治めることで大きく名を上げたのだ。

　目の前の『竜害』は、まだ擬似生命現象としては確立していない。だというのに人間がどれほどちっぽけかをこれでもかといわんばかりに思い知らせてくる。

　まだ本格的な破壊活動を始めていない成りかけであるとはいえ、人知を超越した現象であることに変わりはない。フーズヤードは、こんなところに自分を連れてきた人物へ、心の中でだけバカバカ無茶ぶり上司めと毒づく。

「……おい、フーズヤード」

「ひゃ!?」

　不意の呼びかけに、フーズヤードは奇声を上げつつ我に返る。

　前を歩いているのは、年相応に衰えながらも意思の強さが前面に出ている老婆だ。かくしゃくとした足取りはフーズヤードが小走りにならねば追いつけないほどしっかりしている。

　聖地の大司教、エルカミ。

　教典に記された『主』に仕えるの中でも、頂点に近い立場にいる人物だ。

　まさか、胸中の悪口が見抜かれたのかと冷や汗を流すフーズヤードへ、エルカミはうろんな目を向ける。

「なんだその顔は。笑うほど、楽しみか？」

「へ？」

　笑う。自分が？　あんな、恐ろしいものをのたりにして？

　そんなバカなと、フーズヤードは自分の口元に手を伸ばす。

「え、えへへへ……楽しみだなんて、そんな、まさか」

　口先で否定しながら指先で触れた口元は、だらしないほどんでいた。

　自分は笑っていた。これ以上ない満面の笑みだった。よだれすられそうになっていることに気がついて、慌ててぬぐう。

　そんなフーズヤードへエルカミは不気味なものを見る視線を投げかける。

「『竜害』を見てその反応とは、気が知れんな。あれのどこに笑う要素がある？」

「だ、だって……！」

　まるで自分が異常者であるかのような指摘に、ムキになって言い返す。

「だって、『竜害』ですよ。地脈と天脈の暴走──『龍脈』の顕現！　にも劣らない災害です。普通なら絶対に近寄れるわけも、干渉できるわけもないのに……エルカミ大司教が協力してくれる幸運に恵まれるなんて、えへっ、えへへへ……本当にすごい……！　これが、あるべきなんだっていう【力】ですよ！」

「……やはり、貴様は『龍門』の後継者だな」

　とうとう嬉々として黄色い声を上げ始めたフーズヤードを無視して、エルカミが教典を開く。まだ発生源からは遠いが、いまの場所が生身で『竜害』に近づける限界だ。

　魔導行使の前兆、【力】の発露である導力光のきらめきに、フーズヤードは目を奪われる。

　エルカミは、まさしく奇跡の人間だ。魔導的に完全な人間がいるというならば、それは彼女で相違ない。肉体的な老いなどまったく問題にならない。精神的な不完全性など論ずる気すら失せる。

　肉体も、精神も、魂すらエルカミにとっては不純物であるとしか見えない。魔導学的に完璧な設計図を引いてからつくられたとしか思えないほどエルカミを満たす【力】は完成されている。

　フーズヤードはエルカミのありように陶酔する。

　自分が彼女のようになりたいとは思わない。

　だが自分もいつか── 彼女のような【力】を、創りたい。

『導力：接続──教典・一章二節──発動【を打ちて、始まりの地を知らしめる】』

　たったの一撃。竜害の起点となっている大穴に打ちこまれた導力の杭が、地脈の噴出を止める。

『竜害』において、もっとも恐ろしいのは巨大な導力の塊である疑似生命体『竜』が空間を遊泳し始めることだ。それを防ぐために、教典魔導で力ずくで地脈とのつながりを固定したのが、いまの一撃である。

　地脈からの導力の供給を失った『竜害』が動きを止める。付け入る絶好の機会を逃すエルカミではない。打ち込んだ楔を経路に、教典魔導を発動させる。

『導力：接続──教典・九章三節──遠隔発動【邪悪なる在り処を知り、光にて照らせ】』

　精神体を吹き散らす魔導照射は、肉体を持つ者にはまぶしいだけで無害に等しい。遠隔で発動した教典魔導は、『竜害』を吹き散らすのではなく形成している導力を消費させているのだ。

　地脈からの供給を失い、存在を構成していた【力】を強制的に教典魔導として消費させられた竜が、苦し気に身をよじる。もう少しで生まれ、世界を泳ぎ、自由になれたのにと言わんばかりに導力の脈動が大気を打ち鳴らす。

　それが最後の抵抗となった。

「うぎゃぁ！」

　フーズヤードが悲鳴を上げた。とうとう巨大な『竜害』が存在を保てなくなり、砕け散ったのだ。土砂を主にして、『竜害』が巻き込んでいた物質が崩壊を始めて落下する。

『導力：接続── 教典・二章五節── 発動【ああ、敬虔な羊の群れを囲む壁は崩れぬと知れ】』

　巻き込まれたら死んでしまうと慌てるフーズヤードを横目に、エルカミが教典魔導を展開。魔導によって土砂崩れを思わせる勢いでなだれ込んだ被害から逃れる。

　続けざまにエルカミの持つ教典に、すら浮かばない量の導力が流し込まれた。

『導力：接続── 教典・十二章一節── 発動【打ち付けよ、打ち付けよ、ただ支えるために】』

　数え切れないほどの導力のが、エルカミの周囲に浮かぶ。

「おい」

「はい！　なんでしょうか！」

「どこに打ち込むか、お前が指示しろ。そのために連れてきたのだぞ」

「あ、はい！　そうでした！」

　慌てて指示を出す。フーズヤードが指定した地点に導力の釘が次々と突き刺さっていく。地脈のに食い込んだ導力の釘から導力が伸びていき、経路をつなげていく。巨大な建築物の基部を構築するかのように、広範囲で導力が組み上がる。

　聖域の形成に似ているが、結界とは目的が違う。フーズヤードが使用するための儀式場を形成しているのだ。

　なんて素晴らしい。

『竜害』の残光がきらめくなか、目を輝かせる。フーズヤード一人では、ここまで準備を整えるだけで三ヶ月は費やす。どれだけの素材を使わなければならないか、どれだけの労力をがなければならないのか、試算しただけで気が遠くなる。

　そのすべてを、エルカミはたった一人で肩代わりしてみせる。

　エルカミの力を借りて儀式魔導を行使できる喜びたるや、筆舌に尽くしがたい。自分一人では絶対にできない規模の魔導に手を出せる。なんら責められることのない大義名分を得て、聖地周辺の地脈を自由にいじくれるのだ。

　儀式魔導の行使者として、これほどの幸福があるだろうか。

「寸断された地脈を元に戻すのに、どれほどの時間が必要だ？」

「……え？　あ、はい。えへへ、そうですねっ。周辺の環境を魔導的な最適解にするには、一週間くらいかかります！　私、不眠不休でがんばるので、ぜひ──」

「最短で答えろ」

「──うっ」

　高位神官が十人がかりになれば、三日で終わるか。それ以上の人数を儀式魔導で費やすと、連携の問題で逆に難易度が上がる。おおよその目算を弾き出してから問いかけたエルカミに、徹底的にこだわりたかったフーズヤードはしぶしぶ答える。

「地脈をつなげ直して聖地結界を再起動させるだけなら一時間……もいらないですね。四十五分で完了できます」

　吹き荒れる『竜害』の範囲からかろうじて逃れていた修道院の屋根の上に二人の少女がいた。

　彼女たちは、エルカミとフーズヤードが『竜害』を御しきる一部始終を見ていた。巨大だった【力】の奔流は鎮められて拡散して圧力を失い、名残である膨大な導力光がダイヤモンドダストよりも美しく空間を満たして染めている。

　霧雨のような美しい導力光を浴びている少女の片割れが、口を開く。

「どうにかなるものなんですね、『竜害』って」

　どこか他人事な口調で言ったのは白い神官服を着た小柄な少女だ。メノウのために行動をすることを信条としている神官補佐、モモである。いまの発言は、彼女が原因で『竜害』が起こったことを加味すると無責任の極みだった。

　もう一人、修道服を着た少女は、白手袋をはめたモモの手でをひっつかまれていた。

「そうね。『竜害』が遊泳する前に鎮圧された例が少ないから他と一概には比べられないはずだけど……それよりも、ねえ、モモ」

「なんですか」

　ウェーブのかかった銀髪を肩口に揺らしながら、サハラは自分を捕らえている相手の顔を見つめて乞う。

「もう逃げないから、離してくれない？」

「つかないでくれます？」

　半眼でなされたモモの即答に、サハラはそっぽを向いた。

　サハラの懇願を聞いても、襟をつかむ握力はわずかも緩まない。導力義肢になっている金属的な右腕で引きはがそうとするが、恐ろしいことに義腕の出力よりもモモの腕力のほうが高い。

　モモの予想通り、サハラは逃げる気にあふれていた。

　なにせいまいる場所は完全に危険地帯である。モモとサハラは聖地が崩壊するきっかけを引き起こした実行犯だ。事が露見し次第、即座に処断されておかしくない。のトップである聖地の大司教が見える場所に残り続けているなど正気のではないというのがサハラの見解だ。

　眠たげな目元に似合うけだるい態度のまま、抵抗するだけ抵抗してみる。

「十分、やることはやったと思うの。メノウから頼まれた聖地の結界解除は達成したじゃない。私たちは頑張ったわ」

　聖地が消失した時点でメノウの頼みごとは達成した。ほとんどの実働はモモがこなしており、サハラは立ち会っていただけで特になにもやっていないという一面もあるが、立ち会ったという事実は重要だ。今後サハラは、一生このことについてメノウに恩を着せるつもりである。次に顔を合わせた時にドヤ顔できるという点についてはとても気分がいい。

　もっとも、それもメノウが生きていたらの話だ。

「メノウ、もうに殺されているかもしれないけど。意外よね。メノウがアカリちゃんと一緒に死にに行くのを、あなたが見過ごすとは思わなかった」

「先輩は、生きるための道を選んだんです」

　聞き捨てならない揶揄に、モモがぎろりとサハラをにらみつける。

「やっと生きるための道を選べたんです。だから、絶対に帰ってくるって信じています」

「あっそ。あんな、にでもいい顔する女を信じるなんてバカじゃない？」

「大丈夫ですよ。少なくとも先輩がお前にいい顔したことがないのは、よく知ってますから。みをこじらせないでくださいね」

「は？　なに？　別に私、メノウのことなんてどうでもいいし。あんなだけ女のことなんて知ったことじゃないわ」

「へー、そーですかぁ」

　モモが鼻で笑う。見透かした態度に、サハラは舌打ちした。

　やはり修道院時代からメノウやモモとは通じ合わない。改めて性格の不一致を確認したサハラは目線を聖地の周辺地帯に戻す。

　導力光に満ちて美しいばかりの中空とは裏腹に、巡礼の道であった平地はすり鉢状にえぐれている。聖地の周辺にある修道院と田畑は『竜害』に巻き上げられた影響で壊滅状態といってよかった。竜害の余波がどれだけすさまじいものだったのか、目の前の情景が告げている。

　その『竜害』を散らした教典魔導の規模たるや、発生のきっかけとなったモモの教典魔導が児戯に見えるレベルだった。

「認めなさい、大司教のすごさを。私たちレベルじゃ太刀打ちできないわ」

「そーですね。でもそれ、お前の感想ですよね」

　モモは一度、エルカミの行使した魔導を見ていた。

　四大であるが呼び出した巨軀の魔物すら貫く、光の剣。繊細さと強大さを合わせて束ねた魔導行使には、モモをして戦意を根こそぎ奪われた。その時のことを思えば、『竜害』を散らした魔導に驚くのも今更だ。

「お前がなにを思おうと、誰がどんな被害をろうと、先輩の退路の確保が重要です。ここでぼーっとしててもしょうがないので行きますよ」

「待ちなさい。ここはメノウを信じてなにもせずに息をひそめて待機で──や、やめなさい！　人の腕をもごうとするのは！」

　無言のまま全力で肩を押さえて義腕をひっぱり始めるモモから慌てて離れる。無駄な抵抗をするサハラに、モモは面倒だと息を吐いた。

「いやもう、うるさいんで。お前は口がなくなったほうが役に立ちそうじゃないですか」

「あなた発想の根本が暴力で解決なの、おかしいでしょ……！」

　サハラはメノウと再会して以来、複雑な変節を経て、魔導義肢である腕に精神と魂がしている。腕だけでも意識はあるし魔導も使える。それでも肉体から腕だけ引っこ抜いて持ち運ぼうという発想にくサハラのリアクションなど、モモの心にはまったく響かない。

　モモはメノウが離脱するまで全力を尽くすつもりだった。

　ちなみにサハラからすればメノウは自力で脱出できると思っているし、できなければできないで別にという気持ちなのだ。

　聖地の結界が戻った場合、離脱は困難なものとなるだろう。千年前から残る長距離転移の要である『龍門』。大聖堂は、その施設の保護と守秘のために存在した。聖地の結界が戻った場合、出入り口のない大聖堂が構築され直す。実質、メノウの戻る道が封鎖されてしまう。

「あそこに手を出そうとか、それこそでしょ？　さっきのを見てなかったの？　死にたがりなの？　もしかしてモモはここで死んでくれるの？　すごくうれしい」

「私だって、無理なことは無理だっていう判断ぐらいできますよ。エルカミ大司教を敵に回すのは……無理です」

「意外だわ。ストーカーに人生を捧げている人間の言うこととは思えないくらい理性的ね」

「そうですね。いまお前を殺さない程度には理性的でいてあげますよ」

「それはどうも」

　モモとてメノウのために無茶をするのはやぶさかではないが、失敗すれば不利になることに挑戦する必要はない。大司教を相手にを売るのは無謀を通り越して意味がない行為だ。

「ねらい目はあっちです」

　モモが指さした先には、『竜害』の跡地でせっせと働くメガネの神官の姿があった。

　緑髪にメガネの神官、フーズヤードは【力】が枯渇している大地の地脈を整えていた。

　フーズヤードが地脈に干渉できるようにと、導力経路の基部はエルカミが組み立ててくれた。エルカミが『竜害』を散らした後に教典魔導で生成したのは、普通の街中によくある『』の代用だ。

　人が住む町中には、教会のシンボルマークが納められた石造りの祠が点在している。あれは意味もなく建てられているわけではなく、場所を選んで地脈に干渉し導力の流れを整えるためにされている導器だ。

　ライフラインのエネルギー源として導力を町中に張り巡らせる必要がある都市部はもちろん、【力】のたまり場になりやすい山道などにも祠は建立され、地脈の誘導や観測を行っている。

　各地の地脈の動向を見守るのも、の重要な役割だ。

　エルカミはフーズヤードの指示のもと導力の釘を大地の魔導的要諦箇所に打ち立てることで、一時的な祠と見立てた。中長期で運用できる耐久性はないが、短期的な利用には十分すぎる代物だ。

　フーズヤードは複数の祠に連結する経路へ導力を注いでは自分の精神を分散させ、意識を大地に溶かしていく。

　地脈整備のための儀式魔導で没我の状態にありながら、彼女の気分は上々だった。

　エルカミの命令で竜害鎮圧に駆り出された時は今日が命日かなと絶望していたのだが、意外や意外。素晴らしい役得の連続である。

　聖地周辺を不毛の地にしないためにも、地脈を正常に運用する必要がある。【力】の流れがなくなった土地は、不毛の大地になることがある。大陸中央部にある砂漠地帯などは、地脈が枯渇した土地の代表例だ。

　本来ならばあの地域は、大規模な砂漠ができるような気候ではない。【力】の巡りから外れたせいで地域一帯に生命が根付かずに枯れ果て、千年かけて徐々に砂漠地帯が広がった。

　地脈の整備となればフーズヤードの得意分野である。奇跡の【力】の持ち主であるエルカミが教典魔導によって形成した儀式場を使えるなど役得だと張り切っていた。

　聖地に流れる導力が元通りになれば、【力】の供給も再開されて結界都市である聖地も再構築される見込みだ。

　エルカミはフーズヤードに断絶した地脈の整備を任せ、聖地の跡地に帰還した。つまり聖地結界の再起動後は、好きに周辺の地脈をいじっていいということである。フーズヤードは前向きにそう解釈した。

　建物が戻っても、本格的な聖地の復旧にどれだけ時間がかかることか。そこら辺はフーズヤードの仕事ではないので、彼女は気楽な態度を崩さずにいた。

「ん？」

　地脈を通じて人の気配を感じた。背後からだ。本来のフーズヤードには人の気配などを感じられる鋭敏性はないが、いまは別である。いまの彼女は、魔導的にならば周辺すべてを把握できる境地にある。

　そちらに意識を向けると、見覚えのある導力の流れを感じる。

　若々しく、少しばかり不安定ながらも、稀有なほどの【力】の才能を身に宿している。

　この導力は、一度、視た。

「モモちゃんさん？」

「……気づかれるとは思いませんでした」

　名前を呼ぶと、声が返ってくる。

　フーズヤードの前に姿を現したのはモモだ。この騒動で離ればなれになって連絡がつかずにいた後輩の登場に、ぱっと表情が華やぐ。

「よかった！　無事だったんだ──」

「とりあえず、お前を拘束させてもらいます」

「──なんて？」

　いきなりの宣言に、あっけにとられる。

　ずたずたになった地脈を整えるために労力をかけているところへの宣言だ。誰がなんのために『竜害』を引き起こしたのかを知らないフーズヤードにとってはのでしかなかった。

　だがモモには彼女の同意など得るつもりはない。聖地結界を再起動させないためには、地脈をつなぎ直そうとしているフーズヤードを叩くのがもっとも簡単で確実なのだ。

「すぐに終わりますから、おとなしくしてくださいね」

　あっけにとられるフーズヤードへ、問答無用でモモが躍りかかった。

　一仕事を終えたエルカミは、聖地へと戻っていた。

『竜害』は無事に鎮めることができた。と並び称される災害だが、しょせんは成りかけだ。龍脈のくびきから外れた場合はエルカミ一人の手に負えたものではなくなるが、世界を遊泳し始める前の固定された状態だったため対処はかった。

　それでも被害は甚大だ。特に聖地周辺に点在する修道院は壊滅状態に近い。食料を生産していた田園に至っては、年単位をかけても元に戻る保証などない。寸断された地脈の整備はフーズヤードに任せたので大地が死ぬことはないだろうが、頭の痛い問題である。

　だが、ひとまずは聖地である。

　地脈の整備さえ終われば、結界は自動的に再起動を始める。白く輝く街並みが戻れば、転移駅ホーム『龍門』と『星の記憶』は再び聖地の奥深く人目のつかない秘蔵となる。二つの施設を隠した後に、避難させている者たちを呼び戻して復興作業をさせればいいだろう。数か月がかりの作業になることは間違いないが、これではついた。

　すでに聖地復帰後に思考を回し始めたエルカミが次に関心を寄せたのは、トキトウ・アカリの居場所だった。

　大聖堂の塔内部に監禁していた関係上、聖地跡地のどこかにいなければおかしい。土地勘を持たない彼女が結界の消失後に一人で的確な逃亡ができるはずもないのだ。

　だというのに黒髪の少女の姿はどこにもない。

「出し抜かれたか」

　ここにいないとなれば、行き先はフーズヤードが『龍門』でつなげた転移門の先──『塩の剣』のある大地しかない。まさかとは思ったが『竜害』を引き起こした列車爆破も人為的なものだったのだろう。結界を超えるためだけに聖地に続く大動脈を寸断する人間がいるとは思いもしなかったために、敵の存在に気づくのが遅れた。

　しかし彼女にりはなかった。この場にいない人物が、もう一人いたからだ。

　『』だ。

　抜け目のない彼女のことだ。敵の動きを事前に予測していて先回りしたに違いない。不本意だがトキトウ・アカリに関しては『』の働きに任せることにした。

　の目的が『塩の剣』だとすれば『龍門』の管理者であるフーズヤードが狙われる恐れもあるが、エルカミは一人残したフーズヤードの心配はしていない。あれで、彼女もの神官だ。聖地に任じられる前は世界を放浪していた巡礼神官でもあった。くさいのは確かだが、自称しているほどに無力ではない。万が一、誰かに襲われても自力で乗り切るだろう。

　普段ならともかく、いまのフーズヤードは魔導儀式場に座しているのだ。

「しかし……やはり、ひどいものだ」

　聖地があった場所は見れば見るほど、たるだ。被災地さながら、様々な物品が散乱する跡地を歩いていたエルカミの視線が、不意に止まった。

　人影を見つけたのだ。強制避難勧告は教典を使った通信魔導で発令している。もしも勧告を無視しているような神官が残っているのならばただではおくまいと意気込んで、人影の正体を見たエルカミは驚きに息を止める。

　長く伸びた黒髪を垂らした少女だ。立ち尽くしていた彼女がエルカミに目を止める。

「ひどい有様だね、エルカミ」

　名前を呼び捨てにされるのは、いつ以来か。

　が、からからと渇いていた。声が出るのが不思議なほどに乾燥した声帯で言葉を絞り出す。

「なぜ、あなた様が……」

　の頂点。

　教典に記され、現世に実在する『主』が、そこに立っていた。

　モモのがフーズヤードへと到達する寸前。

　横合いからの衝撃が、小柄な体を吹き飛ばした。

「なッ──!?」

　突然の攻撃にモモは驚きの声を上げる。フーズヤードのいる場所とは関係のない位置から、横殴りにされたかのような衝撃を受けたのだ。モモの導力強化を突破して肉体を傷つけるほどの威力はなかったものの、まったく予想していなかった場所から攻撃をされた。

　しながらも体勢を整えて着地する。

　魔導構築の気配はなかった。フーズヤードは一歩も動いていないし、彼女が紋章魔導や教典魔導を発動させるそぶりもない。

　だが。

「……」

　モモは無言で目だけを動かし、攻撃が来た方向を見る。なにもないように見えるが、集中すれば気配が違うことがわかる。

　大地が、静かに脈打っていた。

　特定の場所だけではない。モモが立っている地面の下で、とくんとくんと導力が鼓動している。人の心臓が脈打つ音に似たテンポで、【力】が流れて広がっている。

　フーズヤードの心臓に共鳴して、導力が脈打ち大地に【力】を運んでいるのだ。

　周辺の地面がフーズヤードと接続している。脈打つ導力はモモの知覚を遥か超えて広がっていく。

　モモは口元を引きしめる。先程の攻撃の理屈はわかった。脈打つ大地から導力が噴き出して、モモの体を打ち据えたのだ。導力を魔導現象に変換することなく、より原始的な圧力を攻撃手段とした。

　導力の物理的圧力を利用するのは、列車を動かす導力機関などと同じといえば同じだ。

　だが、干渉の範囲がおかしい。フーズヤードが掌握している範囲は、人間が個人で知覚できる域を逸脱している。地図で認識すべきレベルの面積だ。

　モモの視線の先にいるフーズヤードは、穏やかで頼りない雰囲気のまま困った顔をしている。

　一見普段と変わりない彼女の目を見て、モモは自分のさを呪った。

「ごめんね、モモちゃんさん」

　焦点が、合っていない。ぼうっとした視線は、モモを見ているようで実像を捉えていない。フーズヤードの気配は祭儀のただ中にある聖職者の神秘を帯びている。

　いまの彼女はモモのことを導力でしか見ていない。モモのことだけでなく、いまの彼女は己自身も含めて、世界を【力】でしか捉えていないのだ。

「いますごく楽し──大切なことをしてるから、邪魔はしないでほしいかな」

　大地に張り巡らされた【力】が、大きく脈動した。

「ッ」

　モモはとっさに飛びのく。だが距離をとったのは不利な要素にしかならなかった。

　真下の地面が揺れる。モモが物理的な鳴動だと感じたのは錯覚だ。大地はそのままに、下にある【力】がぐうっと持ち上がる。殻を破るもどかしさを突破して、導力光が圧力を伴って吹き出す。

　ひどく原始的で、精緻さのかけらもない乱雑さで噴出した導力が、モモの鼻先で破裂した。

「っい!?」

　衝撃が体を打ち据えた。

　いまモモが立っている場所は噴火直前の火山地帯に近い。いつ何時、地面の下を巡るマグマが吹き抜けるかわからない。しかも悪いことに、そのマグマはすべてフーズヤードの制御下にあるのだ。

　足元が敵に回るというのは、モモからしても初めての経験だ。導力を導力のままで殴りつけてくるという原始的で非効率的な使い方だが、フーズヤードの掌握している範囲が広大すぎて、どうにかできる余地がなかった。

「こんな事ッ、できる人間がぁっ、いるなんて……！」

　いっそ、人間かどうか怪しいレベルだ。実はでしたと言われたほうがよほど納得できる。なにせいまのフーズヤードは、かつてモモが古都ガルムで行使した地脈の噴出現象を連続的に、かつ高次元に制御して放っているのだ。

　メノウは地脈を利用する時に、自分の肉体を通して卓越した魔導技術で身に余る導力を制御する。あらゆる導力に対して肉体的、精神的に抵抗がないという特性を生かした導力の操作方法だ。

　その点でいえば、いま行使されている地脈の利用の仕方は、メノウとまったくの逆だ。

　フーズヤードは儀式魔導によって自分の精神を地脈に投じて拡張させている。

　地面を流れる導力に精神をまんべんなく溶かして、擬似的に肉体の一部として取り扱っている。一歩間違えれば肉体から精神が飛んだまま、二度ともとには戻れない。

　精神は薄めて広げることはできるが、総量を増やすことは決してできない。

　広げれば広げるほど自分を自分足らしめている自我が薄くなっていく。フーズヤードの儀式魔導は人格が世界に流れたまま溶けて消えかねない絶技だ。

「ねえ、モモちゃんさん。私ね、儀式魔導の行使者として、常々考えていることがあるの」

　戦闘中であるというのに、フーズヤードはおりを始めた。鼻歌でもでかねないほど気楽な口調であるが、そこかしこの地面から噴出してはモモを襲う導力の圧力は緩まない。

「生命の三要素は肉体、精神、魂の三つだって言われている。導力は魂が生み出す【力】であり、生命の定義からすると魂の副産物でしかないんだけど、これってちょっとおかしいよね」

　モモは噴出して襲い掛かってくる導力を紙一重でかわしながら、なんとか間合いを詰められないかと頭を絞る。

　をスカートのから出して振るう。だめだ。圧力に負けてあっさり吹き飛んだ。糸鋸の欠点である軽さがフーズヤードの操る原始的な導力の暴力と致命的にが悪い。

「導力は素材と組み合わせて正しく扱えば、魔導現象が生まれる。これがどういうことか本当の意味で理解している人って、少ないと思うんだよ。導力は火になり雷になり風になる。可能性として、どんな現象にもなりうる。物質として残り続ける魔導っていうのは残念ながら見たことがないけど……古代文明期なら、もしかしてあったりするのかな」

　いっそ、ダメージを無視して突撃するのがいいかもしれない。

　とうとう竜巻のただ中にいてもこうはなるまいというほどの【力】の流れに取り囲まれたモモは、覚悟を決める。

「素材と正しく組み合った導力がどんな現象も起こせるなら、生命活動っていうのは【力】が引き起こしている魔導現象じゃないのかな。魂が導力の源泉じゃなくって、導力に魂という素材が組み合わされることで起こるのが、私たち人間っていう存在じゃないってことを、どうして否定できるのかな」

　意識が現実に定まっていないフーズヤードの口から、歌うようにとした声ががれる。に脈絡がないのは意識が半分飛んでいる証拠だ。

　ぶん殴って意識の残り半分を飛ばしてやると、拳を握る。

「論証がないただの空想に近い仮定なんだけどさ。エルカミ大司教を見たときからずっと、そう思えてならないんだ。あの人の導力を見ていると【力】の巡りだけで生命は完結できる気がしてならないの」

　普段はとぼけた性格のフーズヤードだが、いまの彼女には世界に深く沈みすぎたせいで真理の一端に取り込まれたのではないかと思わせる神秘性がある。

「もしそうだったら、生命活動だけにとどまらないよね。生命どころか世界自体、な導力が折り重なって奏でられる魔導現象でしかないのかも。この星の中心にある【力】が、この星という素材と組み合って『世界』っていう魔導現象を起こしているんだとしたら……あははっ、もしそうだとしたら、すごいよねっ。この星の導力に接続できれば、世界の歴史っていう魔導現象が解読可能になるのかも！」

　知るか！

　全力で罵声を叩きつけたかったが、モモには声を出す余裕もない。もはや特攻しかないという覚悟を決め、導力強化で身体能力を最大限高めた。

「はい、捕まえた」

　いままさに踏み込もうという時、モモの足元から噴き出した導力光がを描いて周囲を取り巻いた。とっさに顔を上げるが、もあっという間に閉じられる。

　導力の圧力で中のものを閉じ込める、壮麗な光の鳥かごだ。

「うまくできたけど……あーあ。エルカミ大司教には、まだまだ及ばないなぁ」

「なにを、言ってやがるんですかぁ！」

　導力の檻と人間であるエルカミを比較する神経が意味不明すぎる。

　閉じ込められた怒りに任せてモモが全力で殴るが、圧力に弾かれる。広範囲の地脈とつながっているせいで導力の出力が個人のを超えている。

「出せッつってんでしょーがぁ！」

「だーめ」

　怒声とともに何度も内側からく。モモを閉じ込めた張本人であるフーズヤードは、内部でれる音に顔を困らせた。

　多量の導器と複雑怪奇な魔導構成、精神を崩壊させかねない境地にためらうことなく没頭する儀式魔導は、教典魔導と比べてすら難度と規模のが違う。

　儀式魔導を発動させた状態ならば、無類の強さを誇るのがフーズヤードという神官だ。

　モモは感情の高ぶりと導力強化の強度が比例するのだが、怒り心頭のいまですら光の鳥籠から抜け出せない。何度か殴りつければ亀裂が走るものの、壊す端から再生する。導力を固定しているのではなく、大きな【力】の流れにつなげて循環させている証拠だ。川の水面に大岩を投げ込もうとも、すぐに元の流れを取り戻すのに似ている。

「怖いから暴れるのやめてよぉ……。ていうか無駄だって。導力って循環と構成が完全になると不滅性を持つから、外部からの干渉だと壊せないし壊れても元に直るんだよ」

「はァッ？　なんですかソレ!?」

「あれ？　モモちゃんさん、知らなかったの？　……あ、もしかしたら、でも研究専門じゃないと知らないかも。戦闘じゃ使えない理論だもんね」

「戦闘で使えないなら、これはなんだっていうんですかぁ！」

「いやだから、いまやってるのって戦闘のためじゃないし……儀式魔導って導力を操る魔導じゃなくて、世界とつながるための魔導だよ？　自分の魂の【力】を操るんじゃなくて、自分以外の大きな【力】に精神を投じるの。私、地脈の整備に集中したいからモモちゃんさんには大人しくしてほしいんだけど……」

「ここまでして戦闘用じゃないとか、そんなこと言います!?」

「そりゃ言うよ。私、非戦闘員だもん」

　モモを捕らえたからか、フーズヤードの意識の焦点が少し戻っている。

　自称非戦闘員に閉じ込められてしまった戦闘特化タイプのモモの神経を逆なでする発言だが、フーズヤードに悪気はない。事実として、彼女は戦闘要員ではないのだ。

　もしもなんの準備もなく接近戦でモモとフーズヤードが戦えば、彼女は三秒でモモに敗北する。そういう意味では、彼女は神官の中でも最弱の部類だ。身体能力を底上げする導力強化はへぼだし、教典魔導も戦闘用の攻勢魔導はてんで使えない。

　ただ彼女は、魔導の専門集団といえるにあってもで突出した才能の持ち主でもあった。

　世界を巡る導力の経路、龍脈を使った複雑怪奇な魔導構成を編み上げる祭儀──『儀式魔導』の一点で右に出る者がいないほどの傑物だ。

「ちょっと頭を冷やそうよ、モモちゃんさん。いきなり襲いかかってきたことに関してはさ、私も一緒にエルカミ大司教に謝るから。魔物が襲来してきたりいきなり聖地が消えたり『竜害』が発生したりで、びっくりしたんだよね？　モモちゃんさん、もともと巡礼神官だったらしいし、聖地所属に嫌気さしちゃったのかな？　いきなりこんな事件が起こったら、逃げだしたい気持ちもわかるなぁ」

「お前もしかして事態を一つたりとも把握してませんね!?」

「うんうん、わかるわかる。命令違反もしかたないよね！　脱走しようとしたことは黙っててあげる！　そういうこともあるよねっ」

「この能天気ぃ！　そーいう段階じゃないですよ！」

　理解ある先輩発言のようで、その実なに一つとしてモモのことを理解していない発言に怒りのボルテージが上昇する。フーズヤードはモモを閉じ込める行為を片手間に、聖地結界を再起動させるための大動脈との再接続の作業を続ける。

　聖地の再起動まで、あと三十分余り。

　モモとフーズヤードの勝負は完全に決着がついていた。

「ま、そんなものよね」

　魔導義肢である右腕を変形させた射撃用のスコープで遠方から観戦していたサハラは、結果を見届けた時点で義腕を元に戻す。聖地にいる神官は、の中でもりきの精鋭ばかりだ。モモが負けることもあるだろうと当たり前に受け入れた。

　そしてサハラにはモモを助けに行くつもりなどこれっぽっちもない。捕まったモモの場所から背を向けて歩きだす。援護をしろと言われていた気もするが、近距離にいないモモなど怖くもなんともないから言うことを聞く気など微塵も湧かない。背後からモモを撃ち抜かなかっただけ感謝してほしいくらいである。

　さて、これからどうしようか。

　砂漠でメノウの教典に精神と魂をぶち込まれて以来、ようやく誰からも干渉されない自由の身になったと考えを巡らせた時だ。

「どこに行くの？」

　サハラの背後で幼い声がした。

　聞き覚えのあるに、ぎくぅっと肩が跳ねる。慌てて振り返ると予想通りの小さな幼女がサハラの影からいているところだった。

　サハラの肉体は原罪魔導によって再構成されているため、のとして魔導的なつながりを持っている。

　に三つの穴が開いた白いワンピースを着た黒髪の幼女だ。いつも通りの格好かと思いきや、様子が違うことに気がつく。

　着物をローブのようにしてっているのだ。

　幼くか細い肩にかけている白い着物にはサハラも見覚えがあった。この小さな怪物の眷属であるマノンが着ていたものだ。

「あなた、サハラよね」

　なぜか、いまさら確認してきた。ひたひたと近づいてきた幼女が、つま先から頭のてっぺんまでサハラのことを観察する。

「そうね。いまのあたしだと、あなたくらいが、ちょうどいいのよね」

　なにが？

　相手の行動に疑念を抱きつつ、声には出さない。は気まぐれだ。あっさりとサハラを見逃すこともあるだろう。逆に、うっかりサハラを原罪魔導の生贄に捧げることもありえるため警戒を解くことはできない。

「な、なんの用かしら。マノンはどうしたの？」

　な言動は取れないと、まずは曲がりなりにもを制御しているマノンの所在を尋ねる。マノンも大概ではあるが、この幼女よりかは話が通じる。

「……」

　はサハラの質問にえなかった。無言のままひどく冷たい視線をサハラに向ける。

　度重なる違和感に、サハラは内心で首をげていた。

　十歳にも満たない幼子に見えようとも、は純粋概念を暴走させた果てにいるだ。誰になにを言われたところで人間的な反応を返すことはない。

　だというのに、いまの彼女はひどく感情的な気がした。

　そもそも、どうしてマノンの着ていた着物を羽織っているのだろうか。しかもマノン当人の姿が見えない。いままでと違う対面に、ぞわぞわ嫌な予感が重なっていく。

「ね、サハラ。あたしに協力してくれない？」

「……」

　よくわからないが絶対に嫌だ。

　強く思いつつも、拒否できるほどの勇気はない。サハラの肉体を構築したのは彼女だ。もっとも残酷な魔導系列ともいわれる原罪魔導の申し子たるに逆らうなど愚の骨頂である。

　なにより、どうしてから協力の要請などしてくるのか。

　やらせたいことがあるのならば、彼女は一方的にサハラに押し付ければいいのだ。それだけの力があり、他人の心情など気にも留めない残酷性を持ち合わせている。

　いまのおねだりを受けても完全にロクなことにならない。直感など働かせるまでもないほど明確だった。

　だが困ったことに、断っても幸せになれる未来は見えない。の提案をにした瞬間に襲い掛かられても困る。原罪魔導の原点を敵に回したら、死ぬより悲惨な目に遭いそうだ。

　つまりこの幼女に目をつけられた時点で、不幸は決まっていた。サハラは軽く絶望しつつも、小さく無言でいた。

「じゃあ、約束しよ？　サハラがあたしに協力するって、指切りしましょう？」

　左手の小指を立てて、差し出される。

　よくある子供のままごとだ。つかみどころのない『』だが、こういったままごとを好んでいる節があった。言葉だけの約束ならいくらでもしてやろうと、しぶしぶサハラも生身の左手を差し出し小指をめたところで、不意に違和感の理由を摑んだ。

　彼女がサハラの名前を呼んだことが、果たしてあっただろうか。

「指切りげんまん、噓ついたら針千本のーます」

　童謡を歌う幼女の目が、鋭く細まった。

『導力：生贄供犠──混沌癒着・純粋概念【魔】──召喚【ゆーび切った】』

　瞬く間ので、とっさに指を離す間もなかった。

　サハラと絡めていた幼女の小指が、切れた。ぷつんと音がして、ヤモリのが自切するかのように抵抗なく切り離された幼女の小指だけがサハラに絡みついて残される。

　サハラはとして自分の小指を見る。



から切り離されてサハラの小指に絡みついた肉が見る間に黒い指輪となってはまる。小指に張り付くヤモリの意匠。ただの指輪でないことは、小指の皮膚をなぞる動きで嫌でも理解できる。

「あなたくらいで自分が一番かわいい人なら、こうすれば裏切らないでしょう？　いまのあたしだと、あなた程度がお似合いなのよね」

　っな顔になるサハラに、幼女はすまし顔で告げる。自切した彼女の小指が徐々に生えていく過程で、ねていた髪がほどけた。いまの原罪魔導で生贄に捧げた分だけ短くなり、二つ結びにしていた髪ひもが落下したのだ。

　していたサハラは、気持ちを立て直す。

　目の前の幼女を、じっと見つめる。決定的におかしい。の行動原理は、サハラにとってはもっと意味のわからないものだった。脅して言うことを聞かせるなどというわかりやすいことはしない。する意味もない。

「どういうこと？　あなたが、人間と取引なんてするわけがない」

　なぜ彼女が、損得を前提にした行動をとったのか。

「あなたは、なに？」

　疑念をにじませたサハラのに、幼女はことりと小首をける。

「あたしがなにかって？」

　にこりと笑った。そのみに、サハラは確信する。

　絶対的に、笑い方が違う。この幼女はではない。未満の、もっとまともな人間だ。

「知りたいのなら、あなたにいまのあたしのことを教えてあげる。あなたはあたしに協力してくれる、やさしい人だもんね？」

　黒いヤモリの指輪が、ちろりと舌を伸ばして指をめつける。小指にはめられた生きた指輪の効果を確かめる勇気はなかった。

「弱い弱いあたしができる精いっぱいに、協力してもらうから」

　聖地に潜むものと対抗するために。サハラは断れない取引に引きずりこまれていた。

　聖地につながる地脈が、徐々に【力】を取り戻していた。

　フーズヤードの宣言通り、一時間もしないうちに街並みをつくる白い教会が立ち並ぶことになるだろう。聖地の立て直しが順調に進む中、エルカミは立ち尽くしていた。

「どうして……あなた様が」

　エルカミは自分の口から出ている声が震えていることを自覚していた。

　目の前の人物が地上に出てくるなど、『』の小指の襲来と『竜害』の発生をさしおいて一番の異常事態だ。結界が消滅しようが、彼女が地上に出てくるとは想像だにしていなかった。

「どうしてもなにも、事前に伝えてあったでしょ。四大の封が解けるって」

「それは……」

　確かに、その通りだ。一連の事件が起こる前に、教典で連絡を受けていた。

　だが四大の封印が解かれるのと彼女が地上に出てくることが等式で結ばれるとは考えていなかった。出てくるにしても、四大の封印が解けてからだと思っていたのだ。

『主』の帰還。

　それは目の前の人物が、この世界から元の世界── 日本へと、帰ることを示していた。

「四大が解放される前に聖地が消える予定はなかったけどね」

「も、申し訳ありま──」

「いいよ、説明はいらない」

　エルカミの謝罪をって、彼女はゆったりと続ける。

「たださ。君たちは、方向性こそ違うけどあの時代が作った人間としての最高傑作だ。特にエルカミ。君はを敵に回しても対抗できる【力】のスペックがある」

　少女の口元に、うっすらとした冷笑が浮かんでいる。古代文明期を語る彼女の口ぶりは聖地の惨状に対する関心が感じられない。

「なのにこのざまなのは、ちょっと笑えるね」

「……ッ」

　一方的なもの言いに、反骨心が浮かんだ。

　大司教になって以来、面と向かってされたことなど久しくなかった。これだけ被害をる事件のただ中にあって、目の前の人物はなにもしていない。ただ結界の奥にいただけの人物に責められるいわれなどないはずだった。

「あなたが最初から出ていれば、違ったのではないですか？」

「……ボクが？」

「そ、そうですともっ」

　思わずといった様子でエルカミが口走る。口に出してしまったことを後悔したが、一度出た不満は止まらなかった。

　エルカミに限らず、【】は不死となっている。その中でもエルカミの生まれは、もっとも非人間的だ。なにせ母親の腹から生まれたわけではない。それよりも『竜害』の発生に近い。

　魔導理論上、人間として理想的な【力】をつくってから、肉体と精神を与えた擬似生命体の究極化。試行錯誤が繰り返された実験の果てに、魂ができて純然たる生命として発生したのが彼女である。命ができるよりも前に最初に理想的な【力】があったため、導力を活性化すると肉体の状態も引き戻る。

「恩に着せていうけど、当時の君を助けたのは、ボクたちだよ？　ボクの役に立ちたいと申し出たのは、君のほうだ」

　千年前のエルカミの立場は、実験用のモルモットに近かった。倫理観を研究欲で塗りつぶした実験で生まれた生命体がエルカミだ。そこから救ってくれた彼女たちに感謝をしたことは噓ではない。

　千年前の、当時は。

「この世界において、不足のない人間としてできたのが君たちだ。特に、エルカミ。君は【龍】の特性を模倣して造られたから、単純な強さでは他の三人を圧倒する。導力という点で完全な存在の実現を追求し理想値を常に叩き出す【力】は、君のちっぽけな肉体を超越するほどだ」

　自分の特性を解説する相手を、エルカミは満身の力を目に込めてにらみつける。

　彼女自身、当時の記憶はある。というよりも、彼女の主観では、千年前の少女時代から現代までの記憶が飛んでいる。

　他の【】にしても、エルカミと似たような実験で生まれた存在でしかない。

【】というのは、本質的に、遺跡で稀に発掘される古代遺物と変わりない。古代遺物が千年前から起動し続ける導器の名称で、【】は千年前から生き続けている人間だというだけの違いだ。

「君はボクのいる聖地を守るため、代々、として活動している。君と【盟主】に至っては、長く生きるのがつらいって言うから定期的に記憶を消してあげることまでしてるじゃないか。【防人】や【星読み】を見習えとは言わないけど、なにが不満なの？」

「守る必要などあるのですか？　私がどれほどであっても、史上、あなたほどの【力】を得た存在はないではありませんか。私などが、あなたさまを守る必要などないではありませんか」

　エルカミですら、目の前の人物に比べればちっぽけな存在だ。人間としての魔導的理想値を常に叩き出せるエルカミであっても、人間を超越した彼女には及ばない。

　そんな彼女を守るくらいならば、他に手を伸ばしたほうがよっぽど有意義だ。

　エルカミは若いころ、目の前の人物を尊敬していた。心酔して信仰していたといってもいい。彼女こそが『主』を名乗るに相応しいと信じて疑っていなかった。

　だがエルカミがエルカミとして生きるなかで、彼女にも多くの出会いと別れがあった。十年も経てば命を救われた感謝も風化し、信仰に似た心酔は現実への対処に追われることで薄れていった。

　そうして見えてきたのは、『主』という存在の世界に対するズレだ。

　百年も満たぬうちに、エルカミは自分という存在に嫌気が差していた。発生からして他の人間とは異なる完全性は、人の群れにいることに常に違和感を抱かせた。

　なにより。

　こんな自分がいたせいで、見る影もなく禁忌にちた人間すらいるのだ。

「聖地という結界都市をつくり、三つの身分制度をつくり、『主』として陰で君臨している！　第一、【】などというのは、あなたが完全になるための使途でしかなかったッ。私たちが不死だから、それがどうした！　あなたは、私たちの特性すら自分の能力として飲み込んでいる！」

　エルカミはうんざりしていた。自分にも、他の【】にも、目の前の『主』にも。『主』が他のを巻き添えにして、元の世界に帰還するというなら歓迎していた。この世界に二度とわることをしないでくれと強く願い、完遂に力を貸していた。

『主』はこの世界で十分に好き勝手をしたはずだ。

　だからこそ、彼女がいなくなってから新しい世界が始まるのだ。

　目の前の人物の表情から、感情がしていく。それに気がつかず、エルカミは言葉を叩きつける。

「ならばこそ、世界への責任感というものはないのですか!?」

　エルカミの大喝に、相手の瞳から感情の色が消え失せた。

「責任、か。あのさ、エルカミ。ボクがこの世界に対して責任を取らなきゃいけないっていうんなら、聞きたいことがあるんだけど──」

　初めて、一つ目がエルカミを見る。

「──この世界は、『私』をこんなボクにしてしまったボクに、どんな責任をとってくれるんだよ」

　次の瞬間、彼女の全身からの勢いで【力】が膨れ上がった。

　暴発は予想していた。千年前は勇者とも称された彼女の正義感は、残酷なまでの時間の流れで崩れかけている。エルカミはとっさに魔導を構成する。彼女の信じる教典魔導。導力という一点だけを見れば、エルカミは並みの異世界人に勝る。そこに長年かけて鍛え上げた魔導技術を兼ね備えた彼女は、あらゆる存在を加味したうえで、世界でも指折りの強者だ。

『導力：接続──教典・三章一節──発動【襲い来る敵対者は聞いた、鳴り響く鐘の音を】』

　教会の鐘が形成される。高く築かれた鐘楼に吊るされた鐘が、美しくも雄大な【力】の音響を響かせるために動き始める。

　エルカミが発動させたの教会魔導を前に、ただ一言。

「うん」

『導力：接続──完全定着・純粋概念【白】──発動【白夜】』

　太陽が、生まれた。

　に乗るほど小さくとも、それはれもなく太陽であり、【白】が創りあげた一つの世界の出入り口でもあった。

　白いしに照らされた魔導が、消え失せる。エルカミの魔導は白い光に駆逐されていく。発動した教典魔導だけではなく、術者でもあるエルカミすらも巻き込んで飲み込んでいく。

「待ッ──」

「あのね、エルカミ。君って、八十歳を過ぎると、だいたい同じことを言うんだよね」

　振り返ることすらしない。エルカミの姿が現世から消失した。

　殺されたのではない。結界世界に閉じ込められたのだ。白い太陽を中心にした小さな閉鎖世界は容赦なく閉じ込めたエルカミの記憶を削っていく。

「聞き飽きたよ。記憶は消しておくから、もう一度、人生をやり直してね。若い頃の君は、ボクの言うことを疑うことなく聞いてくれるから、そこそこ好きだよ」

　記憶が削り切られれば、若い肉体に戻って解放される。いまのエルカミにとっては決死の反逆も、『主』となった彼女にとっては何度も繰り返した作業に近かった。

「やっぱり、エルカミは若い時のほうが働いてくれるよね……次の名前、なんにするんだろ」

　竜害跡を見る。誰かが争っているようだが彼女の興味を引く要素はない。

　視線を引き戻して、大聖堂のあった場所を見る。

　そこには駅のホームがあった。かつては多くの場所をつなげていた魔導施設『龍門』だ。

「あと、もう少し」

　瞳のろが色づく。

　すり減り、なにもなくなった部分に広がる寒い人生。そこに、ほんの少しだけ感情の色が乗る。

「千年かけた日本への送還魔導が、ようやく完成するんだ」

　駅の線路の先に、輝く光の門がある。『龍門』が生み出した転移の門を抜ければ、真っ白に広がる大地があることを彼女は知っている。

　他でもない、彼女が塩と変えた大陸だった場所なのだ。

　求めるものを手に入れるために、彼女は転移門に腕を入れた。

　短距離の空間転移で塩の大地の出入り口まで戻ったアカリは、真っ先に周辺の導力反応を精査した。

　メノウから一時的に離れていた時、アカリは付け焼刃でモモと戦闘の訓練をしたことがある。そのときは主に対人で戦うための心構えを仕込まれただけで、アカリは戦闘のであるといって差し支えない。飛びぬけて強力な魔導を持ち、ちょっとだけ誰かと戦う心構えを持った少女というのが、少し前までのアカリだ。

　だがいまのアカリはメノウの技能を手に入れている。アカリの主観でメノウの人生を体感したために多くの取りこぼしが発生しているが、それでもメノウが十年以上をかけて身に付けた知識を一瞬で得られたのだ。導力接続の反則具合がわかろうものである。

　紋章魔導を発動させる要領で、導力を地面に浸透させて【力】に反応がないかを探る。念のため、スカートがれるのも構わずにしゃがみ込み、空間ごと切り裂く【断裂】を打ちこみ塩の地面を掘り返しもした。

　アカリができる限り、徹底的に調べ尽くしたからこそ断言できた。

「ないじゃん！」

　アカリの叫びは、誰もいない場所でよく響いた。

　転移門を吹き飛ばすようななど仕掛けられていない。の言葉は、ただのハッタリだった。額にある導器を空撃ちして、堂々と偽ったのだ。

「あーッ、もう！　あの人ほんと、性格わっるいんだからぁ！」

　完全に時間を無駄にさせられたというちに地団太を踏む。

　実際に仕掛けるよりもが悪い。どっちにしても確認はしなければいけないし、ないと確信するまでに時間がかかる。というか、実際に仕掛けていたら存在を伝えることなく転移門を吹き飛ばしていた可能性のほうが高い。

　いまとなっては、アカリも『』のことが幾分か理解できてしまう。

　時間を無駄にさせられた。けれどもメノウは無事だ。導力接続のつながりは薄くなっているが、まだしっかりと感じられる。

　すぐにメノウの元に戻ろうと立ち上がった時だった。

　転移門から、手が出てきた。

「え？」

　不思議なことに、疑問の声を上げたアカリは、突如として手が出現した瞬間を目にしながらも、なぜか警戒心がかなかった。

　転移の門がつながっている先は聖地だ。モモやサハラは『龍門』を抜けてこないようにメノウと事前に打ち合わせている。普通に考えれば、この手の人物は『』の援軍であるの可能性がもっとも高い。

　アカリの立場からすれば、即座に【停止】の魔導でも撃つべきだった。

　だというのに、どうしてだろうか。

　そんなわけがないのに、現れた手を見て、こう思ってしまったのだ。

「……メノウちゃん？」

　向こう側にいるのがメノウだと、確信してしまった。

　バカげた思考だ。メノウはいま『』と戦っている真っ最中である。向こう側から現れるなど、仮定のにも上がるはずがない。

　まともに考えれば一笑に付されることがわかっている。わかっているのに、アカリの目にはメノウの手が伸びているとしか映らない。自分の思考回路と現実のギャップが、アカリを戸惑わせる。

「やめてよ」

　転移の門を通り抜け、一人の少女が現れた。

　長い黒髪の少女だ。長く伸びた黒髪に半分隠れた顔からのぞく彼女の瞳は、深い悲しみに満ちていた。

「ちゃんにだけは、そんな呼び方、されたくない」

　アカリの名を呼んだ彼女は、セーラー服を着ていた。

　見覚えのある服装に、あ然とする。

　セーラー服というだけならば、ここまで驚かない。服装から察するに、日本から来た異世界人なのだろうと、同郷者への共感を覚えるくらいですんだはずだ。

　問題は、そのセーラー服のデザインにあった。

　アカリが転移した時に着ていたものと仕立ての布地から色合いのデザインまで、まったく同一。つまりこの少女は、アカリと同じ学校に通っていた生徒である可能性が高い。

　そして、それ以上に。

「誰？　なんで高の制服を……っていうか」

　アカリは精神的な衝撃に心を揺らしたまま、前髪に半分隠れた彼女の顔を見る。

「どうして、メノウちゃんと同じ顔をしてるの？」

「……」

　今度の答えはなかった。ただ相手の悲しみの色が深くなった。

　変装？　幻覚？　答えの候補を上げても、自分と同じ制服を着ている人物が、メノウと同じ顔をしている理由にはたどり着けない。

　混乱するアカリを前に、彼女は無言のまま手を突き出す。

　アカリがメノウのものだと勘違いした腕が、真白の導力光を帯びた。

『導力：接続──完全定着・純粋概念【白】──発動【白霧】』

　直後、アカリの視界が薄い霧でおおわれた。

　展開された魔導を見て、アカリは我に返る。

　相手の魔導行使は、明らかにアカリが純粋概念を扱うよりも速かった。手慣れている、などというレベルではない。呼吸などするまでもなく、思考と現実がリンクしているかのようによどみなく魔導が発動している。

　疑問は後回しだ。『』のがなかったことを確認したのだ。いまは急いでメノウの元に戻らなければならない。

　相手の正体を考えるのは後でいい。目つきを鋭くして、自分を取り囲む魔導の効果を探る。

　紋章や導器なしで行使されたことからして、純粋概念による魔導で間違いない。

　目くらましにしては霧の濃度が薄い。ぼんやりとだが周囲を見渡すことができた。霧のただ中にいても体に異常はない。魔導の効果はわからずとも攻撃をされたと判断して、指鉄砲を相手に向ける。

『導力：接続──不正定着・純粋概念【時】──発動【停止】』

　アカリの指先に宿っていた導力光が、魔導現象を起こすことなく消えた。

　アカリの失敗ではない。霧が【時】の魔導をえんだのだ。

　対応を間違った。純粋概念の魔導は、お互いが効果を食い合って対消滅する。聖地の大聖堂にいた時と同じ現象だ。まさかそんな効果があったとはと、アカリはをむ。

　まだ霧は残っていた。とっさに霧の範囲から抜け出そうとして、つんのめる。アカリを取り囲む霧の一部が足に集中してまとわりついていた。

「くっ」

　痛みはない。拘束されているという自覚すら持てないほどやわらかい感触だ。優しさすら感じかねない手触りで絡みついた霧は、鉛よりも重くアカリの足を引っ張る。引きはがすも思い浮かばないまま、アカリは前のめりになって水面に叩きつけられた。

「あいたッ」

　悲鳴を上げて、塩の地面に倒れこむ。じゃり、と口の中で音を立てたのは砂ではなく、塩だ。雨水に塩が溶けているのか、口に入った水が塩辛い。

　しょっぱさに顔をしかめながら何度か魔導を発動させようとするも、そのたびに周囲の霧が純粋概念の発動を抑え込む。

　ならばと、対応を切り替える。

　アカリの全身が導力のを帯びる。

　身体能力を上げる導力強化は阻害されなかった。周りを囲む霧は純粋概念にのみ反応しているようだ。おそらく普通の魔導ならば発動できるのだろうが、あいにく身一つで純粋概念を使えるアカリは導器の持ち合わせがない。

　純粋概念の発動は諦めて、強化した身体能力に任せて無理やり上半身を持ち上げる。

　水に濡れた服が肌に張りつく気持ち悪さもなんのその、なんとか体を持ち上げたアカリは、相手をにらみつけるために顔を前に向ける。

　が全身を貫いた。

　見なければよかった。とっさに後悔が背筋を駆け抜ける。一歩も動くことなくアカリを封殺した相手が、じいっとアカリを覗き込んでいる。

　その、瞳。

　日本人によくある、黒い瞳だ。だが、なんと表現すればいいのか。あまたのものを飲み込んだ果てにたどり着いた真っ暗な闇でありながら、なに一つ見当たらないまっさらな平地に見えて、見つめているうちに吸い込まれて真っ逆さまに墜落してしまいそうな奈落がある。顔の半分が髪で隠れた彼女は、一つ目の亡霊に思えた。

　なにを体験すれば、生きた人間の瞳がここまでになるのだろうか。

　相手の手が伸びて、のぞいてしまったにおびえるアカリの額に指が触れた。

　この段になっても、アカリは彼女に敵意も警戒も抱けなかった。

　額に触れた指先の温度を感じて、こう思ってしまう。

　あ、メノウちゃんの手だ、と。

『導力：接続──』

　反射的にすら覚えた次の瞬間。

『時任・灯里──』

　相手の【力】が、アカリの内部に流入した。

「がぃッ!?」

　喉から悲鳴が上がった。びくん、と背筋がのけぞる。電撃を流されたかのように全身がする。導力接続。けれども、いままでアカリが経験してきたものとは、まるで違う。

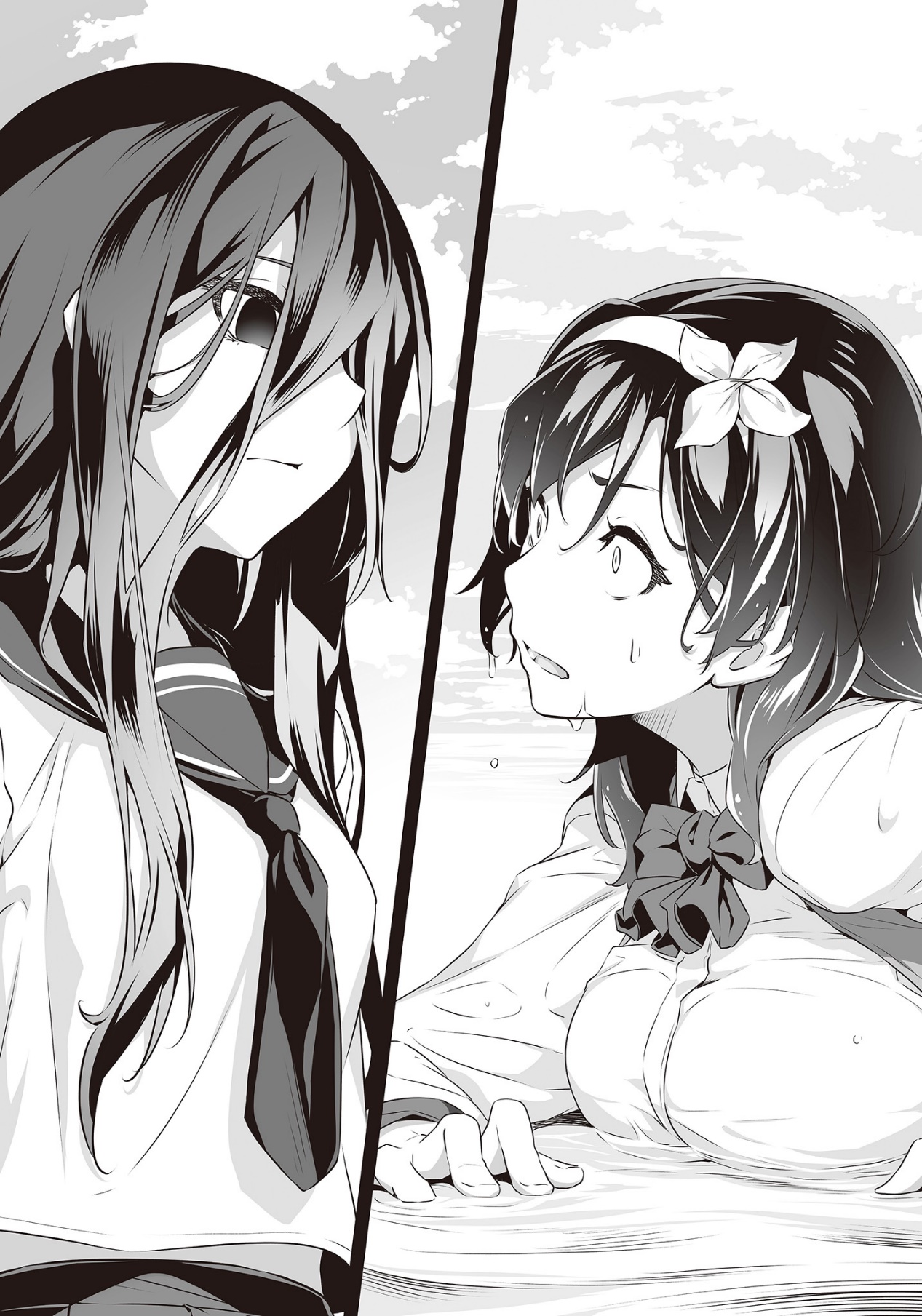
　メノウとの相互接続には、温かさがあった。誰かと一体になるという快感と、すれ合うようなくすぐったい心地よさ。なによりメノウの心の流入には、喜びしかなかった。

　これは、違う。

　極太の針で突き刺されたほうがましだと断じられる侵入。血管の内部に氷でできたがねじ込まれて全身に広がっていくかのような異物感。肉体的な痛みと精神的なおぞましさが同時に襲い掛かって、体内に増殖していく。

　こんなものに全身を中からされたら、おかしくなる。

「ぃい、ん、んん！」



　意味のないうめき声を漏らしながら、全力でった。魂から【力】をみす。魔導は使えない。周囲を取り囲む霧が抑え込んでしまう。ならばこそ、純粋な【力】の出力で押し出す。アカリは自らの魂から導力を引き出し、浸食する【力】に対抗する。

　無駄だった。

　アカリの抵抗をやすやすと食い破って、相手の【力】が全身に食い込んでいく。アカリが自分の理性を砕いてダムを決壊させる勢いで導力を放出しても、まるでを受けた様子がない。比べようもないほどにアカリの【力】を上回っている。

　痛い。冷たい。ひどい。蹂躙されながら、とうとうれる棘がアカリの肉体を突破して精神に触れた。

『導力：接続──』

　力ずくで侵入した導力を経路にして、魔導の構築がなされた。

　アカリは自分の内部で構成された魔導の気配に瞠目する。

　繰り返す時の中で、いままさに組み立てられている魔導と同質のものを何度も目にしている。これは、古都ガルムの儀式場で何度も見た、アレだ。

　アカリは相手の魔導を悟る。理解してしまう。物質として顕現はしていない。だが間違いない。

　人を白く染める、鬼畜の魔導。

　アカリの精神に一滴の白濁液がたらされようとしている。

　怖気が振るった。絶対に侵されてはいけない魔導に対抗するために、アカリは痛みに耐えることすら放棄して純粋概念の魔導を組み立てた。

『導力：接続──不正定着・純粋概念【時】──』

『完全定着・純粋概念【白】──』

　一秒にも満たない一瞬で、二つの純粋概念の魔導がぶつかり合う。

『発動【漂白】』

『発動【停止】』

　まれ！　全霊で魔導を構築した。自分の精神に向けて、【停止】を打ち放った。アカリの精神内での攻防のため、霧は反応しなかった。

　この魔導に侵されるのだけは、許しかった。魔導発動が成功したからか、導力の侵入がなくなり痛みが消えた。痛みなんて、どうでもよかった。【停止】と【漂白】の効果が食い合いを始める。結果はわかりきっていた。認めたくない。絶対に認めたくない。

　それなのに。

　アカリの魔導は、わずかに【漂白】の速度を緩めただけに終わった。

　アカリの精神に、一滴。

　白濁する液体が、かかった。

　アカリが絶叫を上げた。喉をのけぞらせて、あらん限りの拒否を叫んだ。相手の魔導は、アカリの感情にのをせず効果を発揮した。

　消えてしまう。この世界で出会ったすべての記憶が。永遠だと信じていたかけがえのないが。ようやくつながった、メノウとの思いが。いまある絶望すらも。

　ただ、白く。

　真っ白に。

　少しずつ、アカリを漂白していく。

「ぅ、あ、あああ」

　アカリが頭を抱えて、縮こまる。そうすれば記憶の白濁から逃れられるかのように、小さくなる。無意味と知って、それでも本能が防護の姿勢をとる。

「おやすみ……灯里ちゃん」

　アカリの意識が、白く染まっていく中。相手がそっとアカリの髪から白いカチューシャを取り上げる。

「次に起きた時には──一緒に、帰れているよ」

　最後に、メノウの顔をした少女のきが、なぜか胸を締め付けた。

　メノウとアカリが導力接続をして立ち向かってきた場合、自分の勝機が皆無に等しいことを『』は自覚していた。

　自分の弟子のことである。どれだけの練度で魔導を扱えて、どのような覚悟で挑んでくるのか、予測の域を大きく超えることはなかった。

『』が予測したメノウの戦闘力は、彼女を圧倒するスペックになる。

　アカリと導力接続をした以上、いまのメノウにはいままで出会ったどの敵でも圧倒できる【力】がある。マトモにやれば勝てないとわかりきっている相手と正面から戦うなど、バカらしいにもほどがある。

　なにより最大のハンデとして、『』はいま、メノウを殺してはいけないという制限を背負っていた。

　あくまでメノウをここに釘付けにすることが最優先だ。転移の門の下に仕掛けたとハッタリを効かせた導器の有無も、そろそろアカリが確認し終えるはずだ。確認して戻ってきたアカリと合流すれば、『』の勝機はさらに薄くなる。

　明らかな窮地にあって、彼女は自分が負けないことを確信していた。

　遠く離れた大地での戦いを把握している人物がいることを、『』は知っているからだ。の神官が持つ教典は通信魔導を発動させることができる。導力を使った通信機能を持つ導器はすべて、記憶図書館である『星の記憶』の機能に囚われる。

　周辺に誰もいない塩の大地での戦いすら、『星の記憶』の管理権限を持てば見通すことができる。聖地でメノウとアカリが導力接続をした瞬間も目撃していたはずだ。

　ならば、すでに動き出している。条件起動式の魔導は、ハッタリのためだけに使ったわけではない。メノウとアカリを分断したタイミングを知らせるために発動させたわかりやすい合図でもある。

　あとは事態が転換するまでの時間を稼げばいい。

　粘り強く戦闘を引き延ばしていた『』の確信は、見事に的中した。

『』を追い詰めつつあったメノウの集中が、なんの前触れもなく途切れた。

　足を止め、胸を押さえる。端正な顔立ちがにゆがんだ直後だ。

　魂の蛇口が、壊れた。

　そうだとしか形容しようがないほどの勢いで、突如としてメノウの全身から導力光が噴出した。

「──!?」

　声にもならない悲鳴が上がる。突然メノウの内から噴き出した導力の総量は、地脈と直接つながった時ですら【力】を制御せしめた彼女の導力操作技術の上限をあっさりと超える。それどころか、天井知らずに総量が増えていく。

　あまりの衝撃にメノウがを屈した。

　混乱、困惑、焦り。『』の目から見ても読み取るのが難しいほど、目まぐるしい感情が色素の薄い瞳を駆け抜ける。突然の出来事に襲われながらも、『』の弟子は自分の感情を制御において答えにたどり着く。

「アカ、リ……!?」

「──くはっ」

　間に合った。

『』の口元がふてぶてしい笑みにられる。言葉にできない衝撃に動きを止めたメノウを見て、自分のが達成されたことを確信した。

　膝をついたメノウから、慎重に距離をとる。

　メノウの全身から【力】の奔流が吹き荒れる。魔導現象になる前の、原始的な【力】の放出だ。導力のが物質的な圧力を持ってのたうち回っている。メノウの全身から間欠泉のように噴き上がる無秩序な導力が、辺り一帯の水を吹き飛ばす。空を鏡写しにしていた光景が消え、地面を構成する真っ白な塩がむき出しになっても止まらない。むしろ【力】の放出は大きくなって塩の大地を揺るがし、塩でできたい地面に亀裂を走らせる。

　まるで小規模な『竜害』にも似た導力の暴走だ。メノウは必死になって押さえつけようとしているが制御には至っていない。巨大な上に不規則な力の放出。個人で制御できるものではないのだ。

　──ここからだ。

　あとは、最後の一刺しだけだ。

　こうなることは織り込み済みの『』は舌で唇を湿らせる。

　総仕上げを間違えさえしなければ、長年の頼まれごとを達成できる。

　望み通りの展開に、『』は会心の笑みを浮かべた。

　なにが、起こった。

　肉体の内で暴れる導力を必死に押さえつけながら、メノウは歯を食いしばる。暴走する【力】の制御はできていない。できていないが、制御する努力すら放棄したら、すぐさま肉体が木っ端みじんになってしまいそうだ。

　地脈の流れを肉体に通すよりも負担がかかっている。暴れくるう導力は、メノウのものではない。メノウにこんな暴走を発生させる導力量がないことは、自分自身がよく知っている。

　アカリだ。

　導力の相互接続によってつながった、魂の経路。離れても途絶えることのないメノウとアカリの絆から【力】が乱打して送りこまれている。これは意識してメノウに導力を供給しているのではない。アカリが完全に制御を放棄するほどの【力】を酷使している余波だ。

　アカリから送られてきている異常なまでの導力ですら、前触れでしかなかった。

　一拍、ドクンと音を立ててひときわ大きく【力】が脈動した。

　突然、導力の流入は収まった。いや、導力の流入自体は続いている。不規則性がなくなり、高い出力で安定したままメノウへと流れてきている。

　そして、導力以外のものも。

　メノウの精神がった。

　圧倒的な存在がアカリと導力接続している経路をたどって、メノウの魂にまで浸食しようとしている。害する意思はなくとも、そこにあるだけで人の意思などあっさり飲み込む壮大な【力】。なにか、などというのは言葉面でのしだ。メノウは、浸食してこようとする【力】の正体を知っていた。

　純粋概念。

　星より抽出して顕現した概念。異世界人が魂に抱える力の源。アカリとの導力接続で、二度だけ【力】のありように触れたことのある存在に間違いなかった。

　メノウが青ざめた。思わず、の顔を見る。

　戦う前に、はアカリを化させると宣言していた。それで自分の仕事は終わりだと。

　事実、『』は絶好の機会を前にして、メノウを仕留めようとはしない。メノウはそれどころではないほど動揺していた。

　まさか。ありえない。どうして、このタイミングで。唐突すぎる。

　いくつもの否定がメノウの頭をいっぱいにする。アカリは、メノウとの導力接続で記憶を補完したばかりだ。メノウと共有した記憶が一気になくならない限り、暴走を始めるはずがない。そのための導力接続だった。

　だが、起こってはならないはずの事態が、引き起こされている。

「ッ！」

　優位の戦況を放棄して、敵に背を向ける。普通に考えてあり得ない行動だ。メノウがなりふり構わずとの戦闘を放棄しようとするほどの緊急事態が起こっている。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【導枝】』

　メノウの眼前に、導力の巨木が立ちふさがった。

　攻撃ですらない。進路をふさぐだけが目的だ。

　カッと頭に血が上った。

「邪魔ぁ！」

　えたメノウの全身が導力光の燐光を帯びる。導力強化。後輩であるモモばりの強引さで、立ちふさがった導力の枝を破壊する。幸か不幸か、アカリからの導力供給は続いている。メノウは無理やり突破しようと導力強化の出力を一気に上げる。

　だがすぐさま新しい導力の枝が現れる。メノウは殴りつけ、蹴り砕き、前へと進もうとする。

　普段は決して外れない冷静な部分が飛んでいる。次から次へと立ちふさがる導力の枝にメノウの顔が焦燥に彩られる。あからさまにアカリの元に行かせまいという時間稼ぎなのに、決して無視できない。

　いまだ優位はメノウにある。の個人戦力は明確に劣っている。

　だが心理的な優劣は比べものにならない。

　を振り切れないでいるうちに、時間を稼ぐ攻防すらもなくなった。

「見ろ」

　が余裕たっぷりに、メノウの背後を指さす。

「【時】が来たぞ」

　向こうから近づいてくる人影に、メノウが汚泥を飲みほしたような表情になる。

　アカリがいる。だが彼女は、本当にアカリなのだろうか。現れたアカリを見て、メノウは立ち尽くしてしまった。

　はメノウに攻撃を加えなかった。それどころか、短剣を納めた。隙だらけのメノウが目の前にいるというのに、だ。

　こちらに歩いてくるアカリに、外見上の変化はない。水の広がる大地で転びでもしたのか、ブラウスとスカートが濡れて体に張り付いているだけで外傷は見当たらない。

　けれども安堵することなどできなかった。

　すさまじい違和感が目に付く。

　メノウの意識が彼女の姿に吸い付いて離せない。アカリが近づいてくる。メノウは視線をらせない。なぜこんなにも違和感を覚えるのか。食い入るように見つめてしまう。アカリの足元だ。波紋が立っていない。メノウの目元が動揺で震える。足元だけではない。空気すらも凍り付いている。通り過ぎる空間そのものが凍結されている。

　時間停止。

　向かってくるのは、あるだけで世界に干渉する概念。

　あれこそが、世界でも最大の禁忌。

「アカリ……」

　メノウがの望みをかけて彼女の名前を呼んだ。あまりにも弱々しく、なにかをつかみ取るにはすぎる無力な声色だった。

　この距離になっても、アカリの感情がメノウに感応しない。導力接続での魂の経路は保っている。距離に応じて、共感作用は増すはずだ。

　アカリの精神には、なにもなかった。

　なにも。二人の出会いも。旅の記憶も。ほんの少し前に交わした約束も。

　なに一つ、ない。

　忘れられている。

　一度はつながった絆のすべてが失われたショックがメノウを打ち据える。それは、時間を繰り返すたびにアカリが感じていた悲哀に近い。親しい人間から自分の記憶が消え去っている。手と手をつないだ友愛の温かさが消えている。精神がの底に突き落とされたかのような、浮遊感。実際は落下などしていないのに、ひゅっと内臓が浮いたままになる気持ち悪さ。

「ぁ」

　言葉も、出ない。

　アカリの足が、ぴたりと止まった。だがメノウの声に反応したわけではない。アカリの姿をしたソレの意識は、すでにメノウを見ていない。

　彼女が足を止めた理由は一つ。

　そこが、繰り返す時間回帰の始まりとなった場所だったからだ。

　アカリの姿をしたものが、ゆっくりと天をぐ。彼女に全身から、世界の底が抜けたかと見うほどの途方もない導力が放たれる。

『導力：接続──』

　人知を絶した量。大火山の噴火のような勢いながらも、なムーブメントを連想させるほど秩序だっている。

　天をく導力光が数えきれない歯車を組み合わせ、巨大な時計の針を形成する。

『完全定着・純粋概念【時】──』

　彼女はすでに、ではない。

　日本で生まれ育った記憶はもとより、この世界で旅をしたメノウとの記憶すら消し去ることで発生した、アカリだった少女の成れの果て。星より生まれた意思、純粋なる【力】にすべてを浸された魔導現象の先にある概念。

『発動【世界停止】』

　まだ名づけられていない【時】のが、全世界に向けて暴威を振るった。

